

# 学校法人 兵庫医科大学

# 兵 医 広 報

2023  
AUTUMN  
vol.263

建学の精神

社会の福祉への奉仕  
人間への深い愛  
人間への幅の広い科学的理解

## 西宮キャンパス

兵庫医科大学(医学部)  
兵庫医科大学病院  
〒663-8501 兵庫県西宮市武庫川町1番1号  
☎0798-45-6111(代)  
https://www.hyo-med.ac.jp/(大学)  
https://www.hosp.hyo-med.ac.jp/(病院)

## 神戸キャンパス

兵庫医科大学 (薬学部・看護学部・リハビリテーション学部)  
〒650-8530 兵庫県神戸市中央区港島1丁目3番地6  
☎078-304-3000(代)  
https://www.hyo-med.ac.jp/

## 篠山キャンパス

兵庫医科大学  
ささやま医療センター  
〒669-2321 兵庫県丹波篠山市黒岡5番地  
☎079-552-1181(代)  
https://www.sasayama.hyo-med.ac.jp/

兵庫医科大学  
ささやま老人保健施設  
兵庫医科大学  
ささやま居宅サービスセンター  
〒669-2321 兵庫県丹波篠山市黒岡36番地  
☎079-552-6840(代)  
https://www.sasayama.hyo-med.ac.jp/

## 梅田キャンパス

兵庫医科大学  
梅田健康医学クリニック  
〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田1-13-1 大阪梅田ツインタワーズ・サウス13F  
☎0120-682-701(代)  
https://umeda-kenshin-clinic.jp/

<広報誌の送付先変更や配送停止に関するお問合せ>

【兵庫医科大学 医学部 卒業生(緑樹会会員)の方】  
兵庫医科大学 医学部 同窓会緑樹会  
〒663-8501 兵庫県西宮市武庫川町1番1号  
兵庫医科大学 西宮キャンパス 教育研究棟 3階  
☎0798-45-6448 (平日13:00~17:00)  
✉ryokuju@hyo-med.ac.jp

【兵庫医療大学 卒業生(海鳥会会員)の方】  
兵庫医科大学 キャリアデザインセンター  
〒650-8530 兵庫県神戸市中央区港島1丁目3番地6  
兵庫医科大学 神戸キャンパス M棟 1階  
☎078-304-3100 (平日8:30~17:00)  
✉careerdesign@hyo-med.ac.jp

【その他の方】  
学校法人 兵庫医科大学 総務部 広報課  
〒663-8501 兵庫県西宮市武庫川町1番1号  
☎0798-45-6655  
✉kouchou@hyo-med.ac.jp

【兵庫医科大学 医学部 保護者の方】  
兵庫医科大学 大学事務部 西宮教学課  
〒663-8501 兵庫県西宮市武庫川町1番1号  
兵庫医科大学 西宮キャンパス 教育研究棟 2階  
☎0798-45-6159 (平日8:30~16:45)  
✉kyo-gaku@hyo-med.ac.jp

【兵庫医科大学 薬学部・看護学部・リハビリテーション学部 保護者の方】  
兵庫医科大学 大学事務部 学生支援課  
〒650-8530 兵庫県神戸市中央区港島1丁目3番地6  
兵庫医科大学 神戸キャンパス P棟 1階  
☎078-304-3007 (平日8:30~17:00)  
✉gakuseishien@ml.hyo-med.ac.jp

学校法人 兵庫医科大学 広報誌  
兵医広報 vol.263 (2023 AUTUMN)  
発行日/2023年10月31日  
発行元/学校法人兵庫医科大学 総務部 広報課



H 兵医メンバーの EMPOWER EPISODE

# OUR CREW

Special!



兵庫医科大学のUI(ユニバーシティアイデンティティ)で策定したスローガン「EMPOWER THE PEOPLE~心に響く医を、私たちがいるかぎり~」を実践している兵医ファミリーを紹介。今回は、兵庫医大を飛び出して、国際的に医療現場に貢献した経験を持つ4人のEMPOWERエピソードをご紹介します。



## VOICE 01

- ハイチ共和国
- ブルキナファソ
- バングラデシュ

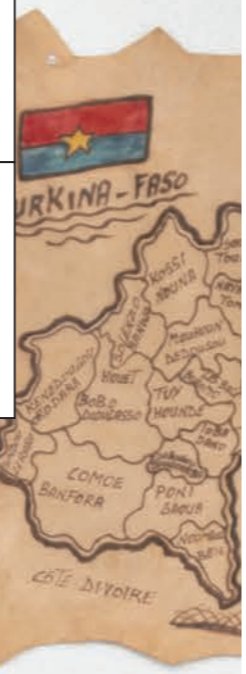


**Hayato Orui**

特定非営利活動法人  
『Future Code』代表理事/  
呼吸器外科医

**大類 隼人さん**

平成18年に兵庫医科大学を卒業。呼吸器外科医として臨床現場に立ちながら、NPO法人Future Codeを設立。兵庫医大を退職後、イギリスのリーズ大学院へ留学して途上国向けの公衆衛生マネジメントを学び、現地と日本を往復しながら持続可能な海外医療支援の構築を目指している。



## EMPOWER THE PEOPLE BY 現場を育てる

TO▶ 現場の医療をいかに育てるか  
持続可能な支援活動のサイクルをつくる

### 持続可能な支援活動を神戸から世界へ

災害医療に携わり、数々の現場へ赴く中、ハイチ地震翌年の2011年にハイチに訪れました。甚大な被害が出ている現場では、病院が全壊しているため、テントでの診療となりますが、テント内ではコレラや結核などの感染症が広まってしまうという連鎖が起こっていました。「貧しい人達を結核から救いたい」と、すでにハイチで医療活動に尽力されていたシスター須藤昭子医師との出会いが、Future Codeを立ち上げるきっかけとなり、2012年より法人化しました。

現在は、ハイチ・バングラデシュ・ブルキナファソを中心に活動しています。ハイチ・ブルキナファソは、現地のNGOなどと提携し、保健医療部分を私たちが担っていますが、バングラデシュには現地法人となる支部があります。支部長は、バングラデシュから兵庫医科大学へ留学していた友人です。彼からの声かけがあり、バングラデシュでの活動がスタートしました。

### ロジックに基づいたプログラムを作り、それをいかに現場に落とし込み、続けていけるか

バングラデシュは平均寿命が70代と伸びてきたため、数年の間に癌などの病気が急増しており、私たちは新病院の建設に着手しています。インフラ整備の遅れを逆手に取り、ドローンで検体を飛ばすなど、日本の病院ではまだ活用されていない最新技術を取り入れる予定です。

一方で、ブルキナファソの平均寿命は50代。乳児死亡率も10%弱と高く、5歳まで生きられない子どもが10人に1人という状況です。その大きな原因は、マラリア・下痢・呼吸器感染症と言われています。マラリア予防として、政府が殺虫剤を練り込んだ蚊帳の配布をしていますが、足りない場

所や適切に使用されていないことも多いのが現状です。蚊帳の補充や、教育・啓蒙活動を行っています。また、ブルキナファソには「トイレ」の文化がなく、井戸の周辺でトイレを済ませるため、飲み水に大腸菌が混入してしまうことで下痢が発生していました。トイレを建設することでそれを防ぎ、同時に住民への衛生教育も行っています。“配って終わり、作って終わり”とならず、正しく持続できるように、現場を育てることが目的です。



### 知ってもらうことで、次の支援に繋げたい

医療・衛生教育だけでなく、私たちができる支援を必要な場所へ届けていくことが大切だと考えています。ブルキナファソはロシア・ウクライナからの穀物輸入の依存率が高く、紛争の影響で、300万人を超える飢餓(人口は約2200万人)が発生しているため、食糧支援や農業の導入支援も行っています。

そして、私どもの大学生からなる学生部が中心となり、現地女性が抽出したシアバターを使用したハンドクリーム『hadanishea(ハダニシア)』の販売を行っています。この事業は雇用の創出にもつながり、利益は医療費や公衆衛生の向上に還元できます。このように、現地に行かなくても、日本にいながらできることはたくさんあります。月1000円から寄付ができるマンスリーサポーターにご協力いただく方もいます。何事も知らなければ何も始まりません。私たちの活動を知っていただくことが、新たな支援の第一歩になればいいなと思っています。

### 大類先生のEMPOWER Thing

お酒を飲んで、ちょっと思考を止めて、普段とのバランスを取っています。街場の人たちと「ああでもない、こうでもない」みたいな他愛もない話をしている瞬間が好きです。医師免許を持っていると言うと驚かれることもありますよ(笑)。中には、支援者になってくれる方もいますしね。ありがたいです。

### 飲みながら友人たちと語り合うこと

EMPOWER THE PEOPLE BY

# その人らしさを大切に

TO▶▶



その人らしさをフラットに受け入れ、  
お互いが「いいね!」と言い合えるチームに

## 未知の環境に飛び込み、 医療の現場で社会に貢献する

元々、私が看護師を目指したきっかけは、「社会に貢献できる」「人の役に立つ」仕事をしたいと思っていたからなんです。看護師は患者さんの側で、「その人を支える」仕事です。結婚をして、子育てをして、今も仕事を続けられているのは「社会と繋がっていたい」という意識が自分の根幹にあるからでしょうね。その一方で、寄付などの支援はすぐにでもできますが、ボランティアは、志を高く持っている人しかできないのでは?という思いもありました。自分が医療で現場に貢献することは本当にできるのだろうかという不安はありましたが、今回の機会をいただき、周りの方に相談してみると、みなさんが背中を押してくださり、ザンビア行きを決めました。ボランティアもアフリカに行くのも初めての経験でした。

## 文化の違いに困惑しながらも、 チーム医療の根底に立ち返る

現地では、主に専門看護師として、ICUの看護師の教育指導をしました。二週間という短い期間で、自分に何ができるかを考え、手術後の早期リハビリテーションのマニュアルなど、日本で実際に行っている手順を英語に訳して説明しました。ザンビアでは、現在もリウマチ熱で亡くなる方がいます。貧富の差も激しく、衛生環境の問題もあります。学歴社会なので、医師の言葉が絶対的であることも……。日本と比べると、約30年前の医療レベルが提供されている場面も見受けられました。救える命を救うために、安全な医療を提供するにはどうするかと考えれば、やはりチーム医療が鍵ではないかと思いました。兵庫医科大学では、パーソンセンタードケアも具現化しながら、特に先進的なチーム医療を行っていると思います。

しかし、日本では当たり前のことでも、ザンビアでは当たり前ではありません。文化の違いからなかなか伝わらず、意思疎通に四苦八苦することもたくさんありました。正直に言うと、今回は伝えるだけで精一杯でした。でも、日本の医療現場と同じく、こちらの考えを一方向的に押し付けるのではなく、「相手に合わせる」ことも大切です。チーム医療の目指すゴールは「協働」。患者さんにとって何が最善の医療なのかを、組織で考えていくことです。それぞれの専門性を認め合い、フラットに議論し、お互い譲れない時には意見を戦わせることもあります。ただ、その真ん中には、患者さんとそのご家族がいますからね。改めて、日本は医療が恵まれているということも実感しました。兵庫医大のスタッフはみなさん、心温かく、自分たちが患者さんにとってできることの中で、何が最善かを常に考え続けています。



## 継続した支援で ザンビアの医療レベルの底上げを

ザンビアの医療レベルの底上げをするには、もう少し時間がかかると思います。現地の病院の副院長が「教育レベルが上がらないと、ザンビアの医療レベルは上がらない」と仰っていて、医療現場を改善したいという熱い気持ちが伝わってきました。応援が必要な時には、日本からでもオンラインツールなどを通して、サポートできるようにしていきたいですね。支援に終わりではなく、続けていくことが何よりも大事ですからね。

東病棟 スタッフステーション

VOICE

02



ザンビア

Ayako Yamaoka

兵庫医科大学病院 看護師長

山岡 綾子さん

兵庫医科大学病院 急性・重症患者看護専門看護師。9東病棟(耳鼻咽喉科、歯科口腔外科、頭頸部外科)の看護師長を務める。国立循環器病センターICU、厚生労働技官などを経て、現職。2022年8月29日～9月9日の間、特定非営利活動法人TICOが行うザンビアにおける国際協力活動の一環として、National Heart Hospitalでの心臓血管外科手術技術移転事業に同行。



TICOがザンビアの国立心臓病院と協働しているのが心臓手術技術移転への取り組み。技術的な面はもちろん、日本では当たり前に行われているケアや衛生に関する情報などを伝えていくことも大切。

## 山岡看護師長のEMPOWER Thing

## 愛犬

現場ではもちろん、周りのスタッフや家族の存在、患者さんからの言葉にも力をもらっていますが、プライベートでは愛犬に夢中です(笑)。一緒に過ごす時間にホッと安らいで、現場ではシーンに合った適切なケアを届けられたらと思っています。



「モロッコである程度、産痛緩和ケアへの理解と周知が進んだら、今度はアフリカの別の国へも活動を広げていきたい」と田村教授。災害下での女性のケアの情報を現地の言語で発信する取り組みも行っている。  
Instagram @mam\_and\_midwife

# VOICE 03



モロッコ



Yasuko Tamura

兵庫医科大学 看護学部 看護学科 教授

田村 康子さん

助産師として神戸大医学部付属病院で勤務中に阪神・淡路大震災(1995年)を経験したことを契機に避難生活下での妊婦や産後の女性の健康や看護ケア、備えに関する研究を始める。2005年より、JICA技術協力プロジェクトの長期専門家(看護継続教育)として、モロッコに赴任。現地のカウンターパートと取り組んだ妊産婦ケア改善への継続教育経験をもとに、帰国後、博士後期課程でモロッコの助産師を対象とした「産痛緩和ケア教育プログラム」を開発し、現在もモロッコをフィールドに研究やケア習得支援を継続。

## EMPOWER THE PEOPLE BY Continuity&Challenge, No hesitation

～ためらわずに、継続とチャレンジを～

TO▶



産痛緩和ケアを知り、お産を良い体験に  
教育プログラムから未来を変える

### 状況やその人に合わせた痛みのケアを

2005年から1年間、地域格差の大きさを背景に、地方における妊産婦ケアの改善を目的としたJICAの技術協力プロジェクトでモロッコに派遣されました。3州11県が対象地域で、妊産婦ケアに関する看護継続教育、IEC(情報・教育・コミュニケーション)を利用した活動、巡回診療強化、保健行政の能力向上を主要な活動として、妊産婦死亡率の低減に貢献し、村落部の女性の健康状態の改善のためにモロッコの保健省や医師、助産師、看護師と共に取り組みました。現場のニーズを知るために訪れた対象地域の産科施設で驚いたことは、産婦さんに対する助産師の役割はあくまでもお産の介助のような形で、産痛を緩和しようとする助産師はおらず、産痛緩和はケアとして認識されていないことでした。産痛をマッサージや温罨法など非薬物的な方法を用いて和らげる「産痛緩和ケア」は基礎教育での学習内容に含まれていない状況がありました。

出産の痛みは自分で和らげるのは難しいので、サポートの必要があります。お産の進行や状況によって痛みは変わっていくので、産婦さんの痛みを理解し、その人にとって一番何が楽で、心地よい方法なのかを寄り添いながら見つけていきます。痛みへの恐怖から緊張を感じると余計に痛みを強く感じてしまうという悪循環に陥ってしまうので、大切なのはコミュニケーションを取り、産婦さんと一緒に考えて産婦さんの安心やリラックスにつなげていくことです。

産痛緩和に関する「ケア」の概念は国や文化により多様であり、そこに変化を起こすことは簡単ではありません。マッサージの効果やエビデンスを伝えると意外に助産師の反応が良かったので、産痛緩和技術に関する学習会や講義をプロジェクト対象地域で何度も行うことができました。しかし、半年後に再び訪れると、ケアを続けている方はほとんどいませんでした。色々工夫をして研修を企画しまし

たが、定着しないのでは意味がありません。

### すべての女性にとって、お産を良い体験に

研究者として研究成果を社会に還元し、未来を変えていきたいと考えています。助産師の地位の向上はもちろんですが、何より、お産を女性にとって良い体験にしたいという思いが根底にあります。そこで、大学院博士後期課程に進学し、「その女性がどうしたいか」というニーズに助産師が応え、産婦さん自身の持つ産む力を引き出すことを中心とした産痛緩和ケアの教育プログラムをつくりました。実際に、産痛緩和ケアをすることで薬剤の使用頻度が減り、自然なお産を助長することができ、会話の機会が増えました。そうした変化が助産師の「もっとこうしてあげたい」という思いにつながり、産婦さんから信頼されたという結果がみられました。女性の一生に「お産」の体験は影響します。より良い経験になるよう、産痛緩和ケアが普通に存在する環境づくりをしていければ嬉しいですね。モロッコはアフリカの中では治安も安定し、就学率も高い国です。産痛緩和ケアが基礎教育に根付く様子が確認できれば、モロッコ国内での成果を他のアフリカの国でも応用できるかもしれません。

### 「知らないことを知る」ことの重要性

中学生の頃に友達と一緒に洋楽の歌詞を翻訳してみると、社会的なことがたくさん歌われていました。今まで自分が知らなかった世界を知り、視野が大きく広がりました。「知らないことを知ること」が支援の一助になればという思いで、ウクライナの戦争や、トルコ・シリア大地震で避難生活を強いられる妊婦さんや育児中の女性が少しでも健康を保つための情報発信を本学の母性看護学・助産学の教員と行っています。ウクライナ語・アラビア語・トルコ語などでSNSなどで拡散しています。地道な取り組みですが、誰かの力になっていければ嬉しいです。

田村教授のEMPOWER Thing

絵を描くこと

やりたいことがたくさんあるので息抜き程度ですが、モロッコでも現地の風景などをスケッチしています。時間が取れたらゆっくり描いてみたいですね。お気に入りの音楽にも力をもらっていますよ。

EMPOWER THE PEOPLE BY

## 迷った時は一歩前に

TO▶▶

医療だけでなく、できることは何でも！  
本当に必要な支援を現場に届ける

## 言葉の壁を越える現地のスタッフの親切さ

私にとって、初めての災害支援が海外での医療活動でした。トルコ・シリアの地震発生の約一ヶ月後。派遣されたところは被害が最も大きかった場所から少し南のシリア国境付近の村でした。元々が危険な地域な上に、被災の状況は良くなっておらず、テント暮らしで住民の生活は成り立っていませんでした。

現地の方のメインの言語はトルコ語。アラビア語しか話せないという方もいました。診療をする際は、アラビア語→トルコ語、トルコ語→日本語もしくは英語というように、場合によっては2名の通訳を介する必要があります。そのため、診療にはタイムラグがありますし、時間もかかります。診察室に知らない人がいる状態なので、プライバシーの問題も。支援に携わるスタッフは、国や職業など、バックグラウンドが違うからこそ、その思いやできることも違います。初めて会う方々と短い時間でチームビルディングを行い、活動していく難しさを痛感しました。

最初は言葉の壁を感じていましたが、完全に伝わらなくても何とかするという不思議な感覚もありました。支援するスタッフも地域の住人の方々も、それぞれが全力で思いを伝えたい、聞きたいという気持ちがあったからだと思います。現地スタッフの方をはじめ、住人の方たちはとても親切で、自分たちも被災している中で私たちを気遣い、一緒に片付けをしたり、差し入れをしてくれたり、活動を支えてくれました。

## 知らない人にだからこそ話せる被災者の本音

トルコへ訪問後に、石川県珠洲市に派遣されました。その地域は高齢者の方が多く、ご自宅を巡回し、自治体やさまざまな職種のみなさんと連携しながら支援にあたりました。中には、ご自身が被災されているにもかかわらず、

「もっと大変な人がいるから弱音を吐いてはいけない」と思っている方も少なからずいらっしゃいました。外から来た人間にだからこそ、家族には言えないような不安を打ち明け、本音をお話ししてくださる



方もおられました。お話をし、すっきりした気持ちになっていただくと嬉しいですが、外部からの支援者が訪れることに対して、現地の方への配慮や、相手はどう受け取るかを考えて行動しなければいけません。常に相手の立場になって誠実に向き合いたいと思います。

## 押し売りではなく、必要とされている支援を

災害は発生してからのフェーズによって、必要な支援のニーズは違います。支援をする側としても、親切の押し売りになってしまったら残念です。そのためには、相手がどんな支援を求めているかというニーズを把握する必要があります。たとえ、医療での支援のニーズがない場合も「医療従事者だからこの仕事はしません」ではなく、できることなら何でもやるというスタンスで臨んでいきたいです。

これからも海外での事業に携わっていきたくと思っていますが、実はトルコへの派遣は、言語への不安があり、当初は断るつもりでした。でも、迷うくらいならとにかく経験した方がいいなと思って、思い切って行ってみたくです。経験が0か1かって大きく違いますよね。実際に行ってみて、かけがえのない経験をたくさんしました。英語以外の言語の国が被災地域になるかもしれませんが、自分の自信のためにも英語の勉強をしています。少しでも現地の方と円滑にコミュニケーションを取れるようになればいいなと思います。

Hiromi Minato

兵庫医科大学病院 臨床検査技師

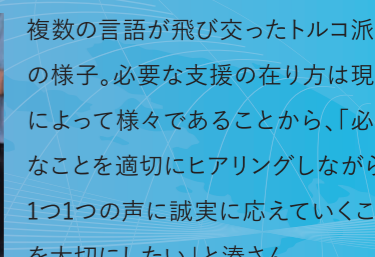
湊 宏美さん

災害派遣医療チームDMATに登録し、NGOピースウィンズ・ジャパン及び空飛ぶ捜索医療団ARROWSによる災害医療支援活動に参加。登録派遣員として、2023年のトルコ・シリア大地震や石川県能登地方での地震支援にも派遣。現在は、DMATのインストラクターを目指し、講習を受けている。

VOICE 04



トルコ



複数の言語が飛び交ったトルコ派遣の様子。必要な支援の在り方は現場によって様々であることから、「必要なことを適切にヒアリングしながら、1つ1つの声に誠実に応えていくことを大切にしたい」と湊さん。

## 湊さんのEMPOWER Thing

## 仲間との食事

現地ではその時初めて会った人ともチームとして災害医療や支援に取り組みます。意思疎通をなめらかにし、共通認識を持つためには食事のシーンはとても大切だと感じます。トルコでお世話になった現地の通訳の方とは今も連絡を取り合い、交流が続いていますよ。

## CONTENTS

### 01 特集 ～兵医メンバーのEMPOWER EPISODE～ OUR CREW Special

- ①現場の医療をいかに育てるか  
持続可能な支援活動のサイクルをつくる  
特定非営利活動法人『Future Code』代表理事/  
呼吸器外科医 大類 隼人さん
- ②その人らしさをフラットに受け入れ、  
お互いが「いいね!」と言い合えるチームに  
兵庫医科大学病院 看護師長 山岡 綾子さん
- ③産痛緩和ケアを知り、お産を良い体験に  
教育プログラムから未来を変える  
兵庫医科大学 看護学部 看護学科 教授  
田村 康子さん
- ④医療だけでなく、できることは何でも!  
本当に必要な支援を現場に届ける  
兵庫医科大学病院 臨床検査技師 湊 宏美さん

### 10 NEWS & TOPICS

- ・多職種連携総合臨床実習を実施
- ・チーム医療(論)演習を実施
- ・2023年度秋季学位授与式を挙行
- ・「なるほど!医学体験 HANSHIN健康メッセ」に出展
- ・株式会社エイチ・アイから医療機器等が寄贈されました
- ・「第119回日本精神神経学会学術総会 精神神経学雑誌投稿奨励賞」を2名が受賞
- ・「第6回日本免疫不全・自己炎症学会総会・学術集会」で優秀賞を受賞
- ・科学研究費助成事業(科研費)の申請支援セミナーを実施
- ・全学教員FDを実施
- ・医学部にて来校型オープンキャンパスを開催
- ・神戸キャンパスにて来校型オープンキャンパスを開催
- ・「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」にかかる講演を実施
- ・利益相反(Conflict of Interest: COI)セミナーを実施
- ・ポーアイ4大学連携事業「ポーアイみんなのサイエンスカフェ」を開催
- ・地域交流プロジェクト「バスボムを作って化学反応を見てみよう」を開催

### 17 HYO-i LAB 研究紹介

脅迫症の治療用アプリを民間企業と共同で研究開発  
認知行動療法をスマホで行える時代へ  
兵庫医科大学 医学部 精神科神経科学講座 助教  
向井馨一郎

### 法人からのお知らせ

#### 20 科研費など交付状況一覧

#### 21 理事・評議員の異動/兵庫医科大学 開学50周年記念事業募金状況報告/ 学校法人 兵庫医科大学基金 兵医・萌えの会 状況報告

#### 22 主な行事予定(11～12月)/ キャンパス通信 ささやま医療センター編

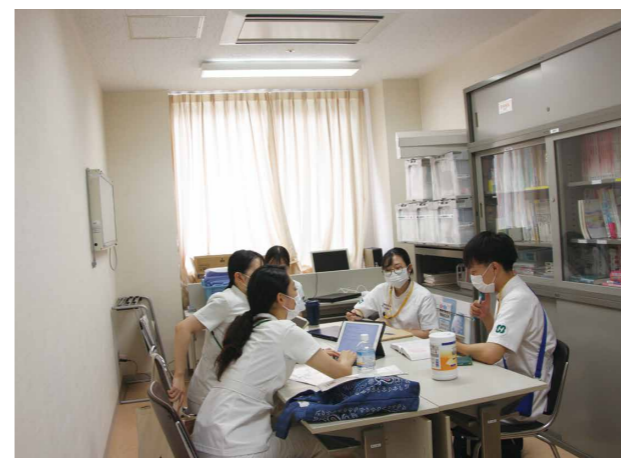
#### 23 「兵庫医科大学×READYFOR」 クラウドファンディングプロジェクト開始

#### 25 メディア実績(7～9月)



## 多職種連携総合臨床実習を実施

学部や職種の垣根を越えたIPE(多職種連携教育)をより一層発展させるため、ささやま医療センターにおいて2023年9月4日～29日の期間で1週間ごとの3クールにわけ、多職種連携総合臨床実習を実施いたしました。参加学生は医学部5年生、薬学部5年生、看護学部およびリハビリテーション学部の4年生で、各クール11～13名が参加しました。それぞれA・Bのグループに分かれ、担当する患者さんの評価や退院治療計画の作成、ミニカンファレンスへの参加、退院指導への参画などを行いました。最終日には1週間の振り返りをまとめてプレゼンテーションを実施し、それぞれ修了証が授与されました。



医科大 チーム医療(論)演習を実施

2023年8月24日から9月1日の7日間、医学部3年生122名、薬学部4年生93名、看護学部4年生102名、リハビリテーション学部4年生84名と関西学院大学の学生5名をあわせた406名が西宮キャンパスに集まり、チーム医療(論)演習を行いました。これまで学んできたチーム医療の総括的な位置づけの授業で、具体的な症例検討を通じてそれぞれの医療専門職者がその役割を理解し、他の医療専門職者とのコミュニケーション能力を身につけることを目的としています。

チーム医療(論)演習の教育目標

- (1) チーム医療の全般的概念を理解する。
- (2) 医療チームを構成する各医療職の役割を理解する。
- (3) チーム医療における多職種連携を理解する。
- (4) 患者に対する全人的医療の重要性を理解する。
- (5) 医療全体を理解し、チーム医療の重要性を体得する。
- (6) 症例に対する論理的な思考を身につける。



初日となる8月24日は、鈴木敬一郎学長の挨拶の後、特別講義として学校法人兵庫医科大学 野口光一副理事長から「痛みの話」、日本赤十字広島看護大学 田村由美学長から「チーム医療の実践:多職種連携」をテーマにお話しいただきました。



チーム医療(論)演習 プログラム

1日目 8月24日	2日目 8月25日	3日目 8月28日	4日目 8月29日	5日目 8月30日	6日目 8月31日	7日目 9月1日
ガイダンス 特別講義 アンケート アイスブレイク ワーク	IRAT TRAT ガイダンス 討議	ガイダンス 討議	ガイダンス 討議 スライド提出	発表会	解説講義 模擬 カンファレンス アンケート	修了試験 総括

8月25日から3日間は、最初にIRAT、TRATといった確認試験を受験した後、学部混成の6~7名で編成されたチームに分かれ、具体的に設定された症例についてそれぞれの立場から意見を述べ合い、どのような治療方針を選択するのがよいかについて議論しました。そこからまとめたものをもとに、プレゼンテーション資料を作り上げる作業をグループ全員で協力して行いました。



5日目となる8月30日には、教育研究棟の202講義室、301講義室、ラーニングスクエア、505セミナー室を利用し、グループごとに発表を行いました。



8月31日に担当教員より解説講義を受けた後、兵庫医科大学病院に勤める医師・薬剤師・看護師・理学療法士・作業療法士・公認心理師による模擬カンファレンスが行われ、学生たちは目指している医療人象を重ねながら、チーム医療のプロフェッショナルによるコミュニケーションに耳を傾けていました。

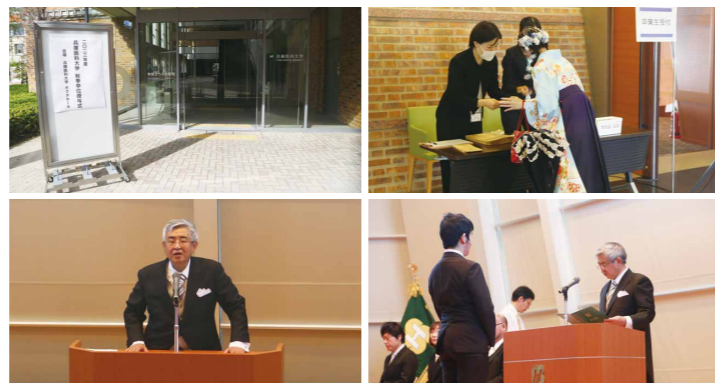
最終日である9月1日には修了試験、そして池内浩基臨床教育統括センター長による総括が行われました。





## 2023年度 秋季学位授与式を挙

2023年9月16日、兵庫医科大学神戸キャンパスのオクタホールにて「2023年度 兵庫医科大学秋季学位授与式」を挙行し、薬学部医療薬学科の卒業生25名、大学院看護学研究科の修了生1名が参加しました。当日は、鈴木学長による式辞の後、卒業生・修了生一人ひとりに対して学位記が手渡されました。



## 「第119回日本精神神経学会学術総会 精神神経学雑誌投稿奨励賞」を2名が受賞

2023年6月22日から6月24日にかけて神奈川県横浜市で開催された「第119回日本精神神経学会学術総会」で、医学部精神科神経科学山田恒講師が「精神神経学雑誌投稿奨励賞」を受賞しました。受賞演題は「下痢を伴う低体重の摂食障害患者における免疫学的グルテン感受性に関する予備的研究」で、摂食障害患者におけるグルテン感受性を調査しました。この結果、下痢の症状がある摂食障害患者のグルテン感受性は非常に高く、下痢と免疫学的グルテン感受性の関連が示唆されました。

また同じく医学部精神科神経科学 本山美久仁博士研究員も「精神神経学雑誌投稿奨励賞」を受賞しました。受賞演題は「うつ病患者における免疫学的グルテン感受性と精神・身体症状の関連性」で、うつ病患者とグルテン感受性の関係について調査をし、免疫学的グルテン感受性はうつ病の発症に関連している可能性が示唆されました。



## 「なるほど!医学体験 HANSHIN健康メッセ」に出展

2023年9月24日、阪神甲子園球場にて阪神電鉄主催による「医療と健康」を楽しく学べるファミリーイベント「なるほど!医学体験 HANSHIN健康メッセ」に特別協力というかたちで本学も出展しました。耳鼻咽喉科・頭頸部外科による「ファイバースコープ体験」と整形外科による「ひざの外科手術を体験してみよう」の2つの体験コーナーを設け、親子連れを含む200名近くが体験しました。



## 株式会社エイチ・アイから医療機器等が寄贈されました

株式会社エイチ・アイより本法人に対し、医療機器や関連する物品が寄贈されました。2023年8月9日にささやま医療センター、8月18日に兵庫医科大学病院、9月5日に兵庫医科大学、9月20日に梅田健康医学クリニックでそれぞれ寄贈式があり、各責任者へ目録が贈呈されました。

### <寄贈物品一覧>

兵庫医科大学	採血・静注シミュレータ	4台
兵庫医科大学病院	電動搾乳機	1台
	母乳温乳器	1台
	バリアフリースケール	2台
	車いす	10台
ささやま医療センター	タブレット端末	6台
	ロールボード	1枚
	ポータブルトイレ	2台
梅田健康医学クリニック	スマートフォン	6台
	液晶テレビ	1台



兵庫医科大学 寄贈式



兵庫医科大学病院 寄贈式



ささやま医療センター 寄贈式



梅田健康医学クリニック 寄贈式



## 「第6回日本免疫不全・自己炎症学会総会・学術集会」で優秀賞を受賞

2023年2月11~12日、御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンターで開催された「第6回日本免疫不全・自己炎症学会総会・学術集会」で皮膚科学の金澤伸雄主任教授が優秀賞を受賞しました。I型インターフェロン関連自己炎症性疾患を有する日本人患者を対象としてJAK阻害薬バリシチニブを52週投与したときの有効性及び安全性を評価したところ、治療選択となる可能性が示唆された研究が評価されたものです。



## 科学研究費助成事業 (科研費)の申請支援 セミナーを実施

2023年6月20日、久留米大学分子生命科学研究所 児島将康教授をお迎えし、科研費支援セミナーを実施しました。第1部のワークショップでは実際に申請書を作成するなど実践的な学びを行いました。また、第2部の講演会では「審査員目線から見た申請書の欠点とその改良方法について」をテーマに講演会を行いました。



## 全学教員FDを実施

2023年8月24日、日本赤十字広島看護大学学長の田村由美先生をお招きし、全学教員FD「多職種連携教育におけるコンピテンシー」を西宮キャンパスで実施しました。参加した本学教職員は、チーム医療を推進するための能力(IPコンピテンシー)、ならびにCompetency-based IPEプログラムの開発・実践・評価について理解を深め、さらなる多職種連携教育を推進していくための学びを得ることができました。







## 医学部にて来校型オープンキャンパスを開催

兵庫医科大学 西宮キャンパスにて、医学部対象の来校型オープンキャンパスを8月7日・8日に開催しました。イベントでは模擬授業や大学・入試概要説明、医学部体験、在学生交流コーナーなどを実施し、2日間で約700名の方々に参加いただきました。

参加した高校生からは「模擬授業が興味深くこちらで学びたいと感じた。」「兵庫医科大学の強みや入試の説明を聞いたり、大学内の見学もできて良かった。」などの感想が寄せられました。



## 「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」にかかる講演を実施

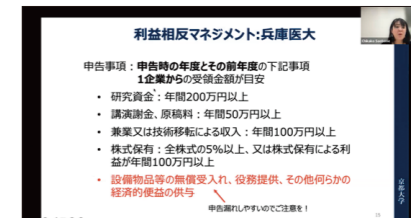
国立がん研究センター研究支援センター生命倫理部COI管理室・室長の中田はる佳先生をお招きし、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」にかかる講演をいただきました。

本講演は指針や倫理審査の基本ルール、近年の指針の改正点など、研究者や研究に携わる職員の適正な理解と臨床研究の推進を目的として、2023年度の研究者倫理講習会として開催しました。



## 利益相反 (Conflict of Interest: COI) セミナーを実施

京都大学 大学院医学研究科 知的財産経営学分野／創業医学講座 特定教授の早乙女周子先生をお招きし、令和5(2023)年度利益相反 (Conflict of Interest: COI) に関するセミナーをWeb配信形式で開催しました。産学連携活動における研究不正・違反の発生を未然に防ぐために、研究者が利益相反マネジメントについての理解・認識を深めることの重要性に関して、分かりやすく説明いただきました。



## 神戸キャンパスにて来校型オープンキャンパスを開催

兵庫医科大学神戸キャンパスにて、薬学部・看護学部・リハビリテーション学部対象の来校型オープンキャンパスを8月5日・6日・20日に開催しました。イベントでは学部ガイダンス、入試ガイダンス、学部体験企画、キャンパスツアーなどを実施し、3日間で約1,900名の方々に参加いただきました。

参加した高校生からは「在学生の皆さんが優しくとても良かった。」「施設がとても充実していた。」「兵庫医科大学の特徴やカリキュラムを知れたので良かった。」などの感想が寄せられました。



## ポアイ4大学連携事業「ポアイみんなのサイエンスカフェ」を開催

2023年8月26日、地域の小学生を対象に神戸キャンパスにおいてポアイ4大学連携事業「ポアイみんなのサイエンスカフェ」を開催しました。参加した小学生たちは白衣を身にまとい、学生スタッフと一緒に水と片栗粉を用いてダイラタント流体を作りました。この流体の不思議な性質を利用して水の上を走り抜けるたびに大きな歓声が上がると、子どもたちが科学を身近に感じ興味を掻き立てる時間となりました。



## 地域交流プロジェクト「バスボムを作って化学反応を見てみよう」を開催

2023年8月30日、神戸キャンパスで地域交流プロジェクト「バスボムを作って化学反応を見てみよう」が開催されました。台風の影響で延期しての開催となりましたが、参加者からは「バスボムを作るのは初めてで、真剣なまなざしで取り組んでいるのを見て、参加してよかったと思いました。薬学部の先生より直々に作り方を教わって、これからの学びに繋がればと感じました。」と喜んでいただきました。

